老人と海

山本周五郎

新潮文庫

彦左衛門外

新潮文庫　や－2－36

昭和五十六年九月二十五日　発行
平成三年二月二十五日　十七刷

著者　山本周五郎
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)三二六六—五一一一
編集部(〇三)三二六六—五四四〇
振替　東京四—八〇八番
価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

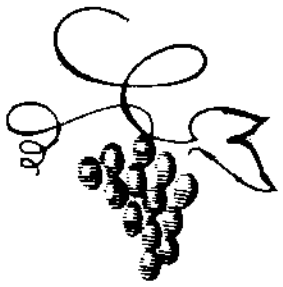
印刷・錦明印刷株式会社　製本・錦明印刷株式会社
© Tōru Shimizu 1960　Printed in Japan

ISBN4-10-113437-5 C0193

新潮文庫

彦左衛門外記

山本周五郎著



新潮社版

2763

彥左衛門外記

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

一の一

五橋数馬は内藤弥九郎の子で、末っ子の三男、十六歳のとき五橋家の養子になった。彼は典型的な末っ子の三男坊であり、心に遠大な野心をいだいているため、肉躰的にも精神的にもはち切れそうな活気が満ち満ちていた。事実、それはしばしばはち切れるので、ごく幼いころから、精神的にも肉躰的にもなま傷の絶えまがなく、つねに両親やきょうだい、また、親族ぜんたいの頭痛のたねになっていた。

彼は幼名を小三郎といった。初めて野心をいだいたのは五歳のときのことで、それは「砂糖漬けの棗をいちどきに五百喰べて母親と夫婦になる」ということであった。

砂糖などという食品は、国持ち大名でもおいそれとは口にできない時代のことだから、三千石ばかりの旗本では「棗」は手が届かない。そこが彼の野心の遠大なところであろう。しかし「母親」のほうは手が届くので、砂糖漬けの棗を二百八十三だけ空想で喰べ（それ以外は空想ですらげっぷが出たそうである）さておもむろに、母に向って云った。

――お弓、こよいはとぎだぞ。

それはときおり、父が母に囁く秘めやかな呼びかけであった。いかに楽天的な筆者でも、これをそのまま読者諸君が信じるだろうとは思わない。まして、そのときの両親と姉のおどろきは非

常なものであった。長兄の弥市は十二、次兄の弥三郎は八歳で、これらはわけがわからなかった。姉のたきは（のちに本田彦三郎へ嫁したが）十三歳になっていて、長兄より一つ年上でしかなかったにもかかわらず、女性というものが、いかに早くそうした消息に通ずるかを、証明するもののように、耳たぶまで赤くなりながら、そっぽを向いてつんとすました。

彼の七歳のときの野心は、大伯父に当る大久保彦左衛門のような人物になって、「隣り屋敷にいる中島勘助の娘を妻にする」ということであった。娘の名はきみ、年は八歳になっていたが、半年ほど経つと、彼は空想できみを離別し、おふじという魚屋の娘をそれに代えた。その魚屋は隣り町の木挽町三丁目にあり、彼女を妻にすれば飽きるほど魚が喰べられるだろう、という功利的な気分も幾らかあったようである。

九歳になると大伯父のことは頭から消えてしまい、従妹に当るみつを正妻にし、おふじは側女に格下げをしたが、次いで、「たぶん魚臭いだろう」という理由で、多少哀れではあったけれどもまもなくおふじには暇をやってしまった。

こういうふうに、十二三歳までの彼の野心は、多く「妻」に関するものであったが、十三歳の後期になると、女性のことはまったく頭から去り、侍だましいに向って急斜面を登り始めた。

このあいだに大坂のいくさが二度あった。冬のいくさは彼の七歳のとき、夏のいくさには八歳で、父の弥九郎も出陣したのに、彼はひたすら「妻」を物色していたわけである。大御所家康が死んだのは九歳の夏のことだったが、四民こぞって哀悼悲嘆するなかに、彼だけは従妹のみつと

魚屋のおふじとに、空想でうつつをぬかしていたのであった。

彼が侍だましいのほうへ急転換したのは、そういう生い立ちに対する反動であったらしい。彼は信じがたいほどの熱烈さで武芸にはげみ、戦記や功名話を聞くために、戦場生き残りの老人たちをできる限り訪ねまわり、その談話をこくめいに筆記した。

彼の武芸はその熱烈な稽古に比例して上達し、功名話の筆記は積り積って、等身の高さに一寸三分足らないだけになった。云うまでもないが、この中には大伯父の談話もはいっていた。大伯父の彦左衛門老は本所のほうに隠棲し、朝顔と菊を作って、暢びりくらしていた。そこはのちに割り下水といわれるようになった土地で、大名の下屋敷が二三と、蔵方や、船方、竹材木方などの組屋敷や、旗本の小屋敷が、畑や、荒地や、雑木林のあいだにちらばっているという、まことに閑静な、というよりも田舎くさい、むしろうらぶれたような環境であった。

大伯父の住居は小屋敷の中にあった。幅九尺ばかりの堀を渡った、細い横丁のどん詰りにあり、百坪ばかりの庭の向うは、芦原と沼と畑と、森に囲まれた農家などの、とりとめもなく広い景色で、天気のいい日には筑波山が見えるという鄙びかたであった。住居はたった二部屋。召使は太兵衛といって、大伯父より一つ年長の老僕が一人。これが煮炊きから洗濯、拭き掃除から外出の供までやる。ぶあいそで無口だが、足腰は壮者を凌ぐほど達者で、米俵を左右の手に一俵ずつ、楽に持って運ぶそうであった。

彼は二十回ばかり本所へかよったが、書き取った筆記は投げてしまった。大伯父の戦記はいさ

ましいものではなかった。いさましくないばかりでなく、それは雑兵でさえ赤面するほどの、みじめでなげかわしい、人間の勇気をへし挫くようなものであった。

「おまえは作り話が聞きたいか」と初めに大伯父は云った、「それともしんじつのことが聞きたいか」

もちろん真実を聞きたい、と彼は答えた。大伯父はさらに念を押した。

「中ぐらいのしんじつか、それともてっぺんしんじつか」

「あとのほうです」と彼は答えた。

大伯父の「てっぺん」は昔からの口癖で、最上級という意味らしい。

――この芋はてっぺんうまい。

――あいつはてっぺんおろか者だ。

――背中がてっぺん痒いぞ。

などといったぐあいである。そしてその「てっぺんしんじつ」を話してくれたのだから、それが真実の戦歴であることには間違いがないであろう。だが、そういう戦歴が真実であるなら、作り話ではなくとも、せめて「中ぐらいの」ほうにしておけばよかった、と彼は後悔したものであった。

将軍秀忠が隠居し、家光が三代将軍になったとき、彼は十六で母方の五橋家へ養子にはいり、名を数馬と改めた。養父の三郎太郎左衛門は五十二歳、七百石ばかりの旗本で、夫妻のあいだに

子がなく、妻女に死なれたので、にわかに養子の縁組がきまったのであった。数馬は七百石ばかりの旗本、それも無役で、ゆくさき出世の手蔓になりそうなひきもない家へ、養子などにはいるのはいやだったが、いつまで部屋住でいるわけにもゆかず、「なに、出世は自分の腕でやればいいさ」と思い返したもので、五橋家へ移ってからは、いっそう身の鍛錬に熱を入れた。

「いまにみろ」と彼はいつも呟くのであった、「いまにみていろ」

一の二

彼の野心はいつも浮動していた。一貫している点は「天下に名をとどろかせよう」ということで、そのとどろかせるということを空想するたびに、自分の存在が空中で雷霆のように鳴りはためくのを感ずるのであったが、いかにして、という手段はそのときによって変化した。

五橋家へはいった年に、シャムから国使が来た。すると、彼の野心はこれまでになくふくれあがり、シャム国へ渡って国王と論判（なんについて論判するかは未定だったが）をしたうえ、場合によっては反乱を起こし、自分が国王になってもいい、とまで考えた。そのとき彼は昂奮のあまり、三日ばかりよく眠れないくらいであった。

明くる年、薩摩へスペイン船が来たということを聞くと、その船に便乗してシャムへゆこうと思ったが、スペイン船の来たのは三月であり、彼が聞いたのは五月だったので、便乗のことは諦めたし、そのころはシャム遠征の熱もさめかかっていたらしい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「残念だ」と彼は独りでおうように云った、「残念だが天運は動かしがたい、シャム国王は暫く天運に感謝しているがいいだろう」

高砂徳兵衛がインドへ渡ったのは、彼の十九歳の年であったが、それを聞いたとき、彼はだしぬかれたことの怒りと屈辱とで、いまにも軀がはち切れるかと思った。彼は徳兵衛が醜い肥大漢で、その顔は顎なし、狡猾そうな眼と赤っ鼻を、熊髭で掩われているものと信じ、空想でもって痛烈に悪罵をあびせかけ、そうして遠征の野心はきっぱりと断念した。

彼は男らしくありたいと思ったので、山田長政がシャム国との交易をはかり、幕府から朱印を貰ったと聞いても、少しも羨望や嫉妬は感じなかったし、板倉重正がロスン遠征を計画していると聞いたときも、ただ、「へえ」と云っただけであった。尤も、彼はすでに二十三歳になって、その野心もかなり現実的になっていたのではあるが。――現実。彼は眼をぬぐって周囲を眺め、天下の情勢を考え、その中でなにが可能であるかを検討した。

彼は自分の才能を、掛値なしに評価してみ、極めて謙虚に、武芸であると思った。

「刀、槍、弓、馬術、小具足――と彼は得意の武術を並べてみた、「この五技なら人には負けない、この中のどの一つでも、天下に名をとどろかすだけの自信がある」

市中には浪人者が多くなっていた。大坂のいくさで敗亡した諸侯や、そのあとで取潰された大名の家来たちのうち、腕におぼえのある者は出世の機会を求めて回国し、もちろん江戸へもしきりにくだって来た。名を知られているか、手蔓のある者はいいが、その他の人たちは自分で機会

を作らなければならない。そこで、市中にある広場や空地には、高札を立てて武芸の試合を挑む浪人が少なくなかった。

かれらは人の注意をひくために、その試合にしばしば金を賭けた。

「自分が負けたら金十両を進上する」と高札に書き、現実に慶長大判などを見えるところに置いたりした。

五橋数馬はこれに眼をつけた。

――浪人たちにとって出世の機会となるなら、おれにとっても同じ値打がある筈だ。

柳生、小野など第一級の道場は、門人の数もおびただしいし、上が閊えているから、頭角をあらわすことはなかなかむずかしかった。また、そのころは武芸などにも形而上の理屈をこねる風潮がおこり、単に腕前が強いだけでは達人とは認められない、というような通念がはびこり始めた。数馬のように、はち切れそうな野心をいだいている者は、そんなまどろっこしい情勢につきあってはいられない。すでに武家諸法度が定められ、駅馬駄賃の制ができ、二度も大奥法度が発令され、東海道三度飛脚などもきまるというふうで、徳川氏の天下は安定する様相を示していた。このまま安閑としていては、七百石の旗本のまま据え置きにされる可能性が濃い。したがって、いまのうちになにかひと働きやり、自分の存在を世に知らせたうえ、もう一段出世しておかなければならない、と彼は強く決心したのであった。

こうして彼は、浪人たちと野試合をするようになり、しばしば勝って、賭けられた賞金を手に

入れた。向うが賞金を出すのだから、試合のときにはこっちも同額の金を並べなければならない。そこで彼は四五人の友達を誘惑して出資させ、集めた金で試合に出、勝って得た金には利を付けて返す、という方法をとった。

彼はごく稀にしか負けなかった。勝ちめのなさそうな相手は避けたし、狡猾といってもいいくらい頭がよかったので、腕に差があるときは巧みに頭を働かして勝った。しぜん出資する友人たちも多くなり、ついには出資者を輪番制にするという仕儀にまで発展した。

これが二十五歳の春まで続き、ついに大田原禅馬と試合する日を迎えたのであった。

大田原禅馬は采女ケ原に高札を立てていた。京橋木挽町から築地へ向うところで、埋立ててからまだ年数が経たず、原には水溜りがあるし、雑草や芦が生い繁り、地面はでこぼこの石ころだらけであった。

禅馬はそこに幕張りをし、高札には賞金二十両と書き出し、門人ふうの者を七人伴れていた。古法蔵院源流といういかめしい流名の棒術家で、それまでに十人以上と試合をし、全勝を続けているという評判であった。金二十両となると高額であるが、数馬はひそかに禅馬の試合ぶりを見にゆき、これなら勝算ありとにらんだので、輪番制の出資者ぜんぶを勧誘し、二十両を持ってでかけていった。

暖気の高い日が続いたためだろう、采女ケ原はもう青草に掩われていた。三カ所に群れ集まっている人垣の上へ、甘ったるく重みを含んだ晩春の日光が、穏やかに明るく降りそそいでいた。

二カ所には野師が人を集めているらしい、禅馬のところでは、門人たちが棒の稽古をしている、それを取巻く人たちも、侍や小者、武家の女性や子供たちが多かった。

大田原禅馬は床几に掛けていた。図柄の判然としない幕を背に、鉄扇を膝に突き立て、大きな隻眼を細めながら、門人たちの稽古を眺めていた。右の眼は潰れて穴になっているが、左の眼は大きく、まるで両眼が一つになったようにみえるし、細めてはいるが眼光にも力があった。

「おい、大丈夫か五橋」高木善四郎という友達が云った、「見たところ相当なつら構えじゃあないか、門弟たちも相当やるようだぞ」

「そうだ、ひと癖ありそうなやつだ」と神谷弥助が云った、「あのつら構えは相当なもんだ、金二十両だからな、こいつは考えもんだぞ」

一の三

七人いる友達の中で、高木と神谷はいちばん仲がよく、馬と馬方のように絶えずいっしょだし、片方が「寒い」と云えば片方がすぐにくしゃみをし、片方が「眠い」と云えば片方がすぐに欠伸をするというくらい、肉躰的にも精神的にもしっかりと結び付いていた。

「ちゃんと手は考えてあるんだ」数馬は他の五人まで動揺し始めるのを、軽く抑えながら云った、「あの男は右の眼が潰れているだろう。だからたいていの者が右のほうを攻める、そのために却って右は固いんだが、眼のあいている左のほうは弱い、おれは下検分に来てちゃんとそれを見て

いるんだ」
「ちょっと待て」と高木が遮った、「その理屈はおかしいぞ」
「そうだ」と神谷がすぐに云った、「それはちょっとおかしな理屈だ」
「その理屈で云うと」高木が云った、「左の耳がつんぼの人間は左の耳のほうがよく聞えるということになるぞ」
「そのとおりだ、つまり」と神谷がすぐに云った、「つまり、右の鼻が詰っている人間は、詰っている右の鼻のほうが、よくとおる左の鼻よりも、よく匂いが嗅げるということになるじゃないか」
「これは耳でも鼻でもない、眼の問題だ」と数馬が答えた、「武術の試合には耳がよく聞えるとか、なにかの匂いがよく嗅げるかどうか、などということは、おい、よせ」と数馬は云った、「試合をするのはこのおれできさまたちじゃない、よけいな口出しをするな」
そして彼は進み出ていった。
数馬は相手と名のりあい、台の上へ金二十両を置いてから、身支度をして、木刀を袋から出した。大田原の棒は九尺ほどの長さで、黒光りにつやつやと光っていた。彼はまずその棒に素振りをし、次に幾種類かの型をやってみせた。喉からほとばしり出る気合は、千尺立方の空気をひき裂き粉砕するかと思われるほどするどかったし、縦横上下に円を描き鉤を引き弧を飛ばす棒はまるで笛鳴を発する陽炎のようにみえた。眺めている群衆はもとより、数馬に出資している七人も

これにはすっかり肝を抜かれ、自分たちの出資金が、極めて憂うべき事態に当面したことを感ずるのであった。

五橋数馬は杭のように立っていた。

彼は木剣を右手に持ち、背骨をまっすぐにして、棒杭のようにまっすぐに立っていた。大田原の示威運動にもまったく無関心で、まっすぐ直立し、まっすぐに前方の一点をみつめたまま、微動もしないのであった。彼の凝視しているほうに、薄い被衣を衣た武家の女性がいた。むろんこの試合を見るために立寄ったのであろう、侍が五人ばかりと、侍女らしい者が二人、その女性のまわりを取巻いていた。

「おい、あれを見ろ」神谷弥助は高木善四郎を肱で小突いた、「五橋の眼の向いているほうだ、あそこに被衣を衣た婦人がいるだろう」

「ああ、被衣を衣た婦人がいるな」

「よし」と神谷が頷いた、「こんどはもういちど五橋の眼を見ろ」

「五橋の眼を見た」

神谷が不吉なひびきのある声で云った、「さっきから五橋は身動きもしないが、あの婦人にみとれているんだとは思わないか」

「思うな」高木は唸り声をあげた、「慥かに、あれは被衣の婦人にみとれている眼だ」

「ばかなことを云うな」青山藤七郎という出資者の一人が云った、「あれは五橋がもっとも得意

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com